7　肉用牛生産地帯の低マグネシウム血症発生低減への５年間の取組

上北地域県民局地域農林水産部十和田家畜保健衛生所

○松村聡子　小田桐千鶴恵

十和田市内の複数の肉用牛繁殖経営農場で、平成 25 年度以降、食欲減退・廃絶、軽度振戦、歩様蹌踉、起立不能等の症状を呈する牛が増加。検査を実施したところ、平成 25 年度以降の 122 例で血中マグネシウム（以下 Mg）濃度は 0.3～1.9mg/dl であり死亡例もあったが典型的な強直死は無し。症例の多くは放牧場を利用しており、その土壌はカルシウム（以下 Ca）、Mg が流出しやすい火山灰土。平成 23 年度以前は牧草地に苦土石灰が散布されていたが、現在は未実施。実態把握のため、市内４放牧場及び管内他市町村の放牧場で放牧直後と 2～3 か月後に血中 Mg 濃度を測定したところ、それぞれの中央値は 1.8～2.8mg/dl、2.1～3.0mg/dl と有意な差は認めず。臨床獣医師に対しては、低 Mg 血症発生の可能性が高い地域であることを周知。また、発生農家や公共牧場に対し、Mg を含むサプリメントの利用や草地への苦土石灰の散布及び草地更新について指導。さらに、生産者や関係者に対して、研修会等で低 Mg 血症について説明し、飼養管理上の注意を喚起。この結果、臨床獣医師、農家、放牧場管理者等の関係者の意識が高まり、血液検査依頼が積極的に実施され、重症化事例が減少。しかし、市内の放牧場は土壌特性から Ca、Mg が枯渇しやすいため、今後も関係者と協力しながら、定期的なモニタリング検査も取り入れ損耗低減のため指導を継続していく。